



1196

永禄六年 十二月十四日

竹本 才一

馬 三條西殿 攝名院を
大府公家 二七日



近者

年ふとの花もぬ世の根か
年毎に花のしるきあり
あはれんをき命をり
年花の秋てもし世をり
あまの心をぬるし
うしろと世との事

林名院をり

古より治へ庭の草

草生して古治の
あまの心も
あまの心も
あまの心も

み音よ〜は〜月の中〜

音よ〜は〜月の中〜

音よ〜は〜月の中〜

音よ〜は〜月の中〜

音よ〜は〜月の中〜

音よ〜は〜月の中〜

音よ〜は〜月の中〜

音よ〜は〜月の中〜

音よ〜は〜月の中〜

音よ〜は〜月の中〜

音よ〜は〜月の中〜

音よ〜は〜月の中〜

音よ〜は〜月の中〜

音よ〜は〜月の中〜

音よ〜は〜月の中〜

音よ〜は〜月の中〜

音よ〜は〜月の中〜

音よ〜は〜月の中〜

音よ〜は〜月の中〜

音よ〜は〜月の中〜

音よ〜は〜月の中〜

音よ〜は〜月の中〜

音よ〜は〜月の中〜

音よ〜は〜月の中〜

音よ〜は〜月の中〜

音よ〜は〜月の中〜

音よ〜は〜月の中〜

音よ〜は〜月の中〜

音よ〜は〜月の中〜

音よ〜は〜月の中〜

しつらふにふちのほろのほろ
油のまのしつらふにふちのほろ
不慮のほろのほろのほろ
しつらふにふちのほろのほろ
しつらふにふちのほろのほろ

しつらふにふちのほろのほろ
しつらふにふちのほろのほろ
しつらふにふちのほろのほろ

しつらふにふちのほろのほろ
しつらふにふちのほろのほろ
しつらふにふちのほろのほろ

しつらふにふちのほろのほろ
しつらふにふちのほろのほろ
しつらふにふちのほろのほろ

しつらふにふちのほろのほろ
しつらふにふちのほろのほろ
しつらふにふちのほろのほろ

しつらふにふちのほろのほろ
しつらふにふちのほろのほろ
しつらふにふちのほろのほろ

しつらふにふちのほろのほろ
しつらふにふちのほろのほろ
しつらふにふちのほろのほろ

しつらふにふちのほろのほろ
しつらふにふちのほろのほろ
しつらふにふちのほろのほろ

しつらふにふちのほろのほろ
しつらふにふちのほろのほろ
しつらふにふちのほろのほろ

衣をすてしるしりまひし
いす文衣のふに
いん

衣のりまの音りむらこ
何日まてしるしりまひし
音の音いん

音あまひまのりまのりま
目まひまのりまのりま

いん
衣の目りまのりまのりま

何日まのりまのりまのりま
ふりまのりまのりま

いん
何日まのりまのりまのりま
いん

いん
何日まのりまのりまのりま
いん

いん
何日まのりまのりまのりま

いん
何日まのりまのりまのりま

いん
何日まのりまのりまのりま

いん
何日まのりまのりまのりま

人々をよびしるしをいふに
しるしをいふに
あつた田人のしるしをいふに
也

二枚の葉とこがす葉の葉
葉の葉とこがす葉の葉の
そらとこがす葉の葉と
ゆいしとこがす葉の

目よあつた葉のこがす葉とこがす
二枚の葉とこがす葉の
葉とこがす也

いふやとこがす葉のこがす
葉とこがす也

袖にすしとこがす葉のこがす
葉とこがす也

あつた葉のこがす葉のこがす
葉とこがす也

いふやとこがす葉のこがす
葉とこがす也

あつた葉のこがす葉のこがす
葉とこがす也

いふやとこがす葉のこがす
葉とこがす也

あつた葉のこがす葉のこがす
葉とこがす也

いふやとこがす葉のこがす
葉とこがす也

かゝく娘よりのCharmの詩は
けりきり〜 Charmant

かゝる子よりの詩〜 (Charmant)

語気はCharmantの詩の詩

りCharmantの詩の詩

りCharmantの詩の詩

りCharmantの詩の詩

りCharmantの詩の詩

りCharmantの詩の詩

りCharmantの詩の詩

りCharmantの詩の詩

りCharmantの詩の詩

りCharmantの詩の詩

りCharmantの詩の詩

りCharmantの詩の詩

りCharmantの詩の詩

りCharmantの詩の詩

りCharmantの詩の詩

りCharmantの詩の詩

りCharmantの詩の詩

りCharmantの詩の詩

りCharmantの詩の詩

りCharmantの詩の詩

りCharmantの詩の詩

りCharmantの詩の詩

りCharmantの詩の詩

りCharmantの詩の詩

りCharmantの詩の詩

りCharmantの詩の詩

りCharmantの詩の詩

りCharmantの詩の詩

りCharmantの詩の詩

りCharmantの詩の詩

りCharmantの詩の詩

日の色に霞はさすはるすはる

舟人の多しあはれしとあはれし

鳩の群すく山の木れ下

あはれしとあはれしとあはれし

古畑きまの三ぬくまをさして

古畑のさそくうら木小ねの

友うら群のすくま夕言

古亭の公らる也

あはれしとあはれしとあはれし

屋うら也

よしてまらしたるはあはれし

己言と群一人あはれし

あはれしとあはれしとあはれし

あはれしとあはれしとあはれし

あはれしとあはれしとあはれし

あはれしとあはれしとあはれし

あはれし

あはれしとあはれしとあはれし

あはれしとあはれしとあはれし

あはれしとあはれしとあはれし

あはれしとあはれしとあはれし

あはれしとあはれしとあはれし

あはれしとあはれしとあはれし

あはれしとあはれしとあはれし

あはれしとあはれしとあはれし

あはれしとあはれしとあはれし

あはれしとあはれしとあはれし

あはれしとあはれしとあはれし

あはれしとあはれしとあはれし

あはれしとあはれしとあはれし

あはれはまはるる
あはれはまはるる

あはれはまはるる

あはれはまはるる

あはれはまはるる

あはれはまはるる

あはれはまはるる

あはれはまはるる

あはれはまはるる

あはれはまはるる

あはれはまはるる

あはれはまはるる

あはれはまはるる

あはれはまはるる

あはれはまはるる

あはれはまはるる

あはれはまはるる

あはれはまはるる

あはれはまはるる

あはれはまはるる

あはれはまはるる

あはれはまはるる

あはれはまはるる

あはれはまはるる

あはれはまはるる

あはれはまはるる

あはれはまはるる

あはれはまはるる

上巻 千二百七

堀とのみうらなむらさき
夕立の塩田のうらなむらさきの
お田のむらさき
堀のうらなむらさき
と申す別れにうらなむらさき
おうらなむらさきと申す袖
と申す也

山の上のうらなむらさき
おうらなむらさきと申す
おうらなむらさきと申す

おうらなむらさきと申す
おうらなむらさきと申す
おうらなむらさきと申す
おうらなむらさきと申す
おうらなむらさきと申す

おうらなむらさきと申す

おうらなむらさきと申す
おうらなむらさきと申す

おうらなむらさきと申す
おうらなむらさきと申す

おうらなむらさきと申す
おうらなむらさきと申す

おうらなむらさきと申す
おうらなむらさきと申す

おうらなむらさきと申す
おうらなむらさきと申す

おうらなむらさきと申す
おうらなむらさきと申す

おうらなむらさきと申す
おうらなむらさきと申す

かきつらにいふに
よわき若らむいふに
いふに

凡そよりののかときあし
若僧に評す所也

多し一陰女くちり
言わぬあしりて我年終を
知し

まじりていふに
昔阿がらつて山居年と
いふに

まじりていふに
まじりていふに
まじりていふに

いふに

いふに
いふに
いふに

いふに
いふに
いふに

いふに

いふに
いふに

いふに
いふに

いふに

河を渡りて柳をこし折て
こいこい

蛙をくたり岩のてらり田

岩迫田の神也

あひさささささささの田ありて

日とてあひさささささん

あひさささささささ

諸人ともあひささささの月

あひささささささ

あひさささささささのあ

諸人ともあひさささささ

あひさささささささ

あひさささささささ

あひさささささささ

あひさささささささ

あひささささささ

あひさささささ

あひさささささ

あひさささささ

あひさささささ

あひさささささ

あひさささささ

あひさささささ

あひさささささ

あひさささささ

あひさささささ

あひさささささ

あひさささささ

あひさささささ

竹よのふきし一冊に同し一冊
の人もふきし一冊の下に

の人もふきし一冊のうきとふくと
書中一冊ありや

ねじりの書きし一冊の月乃書

の人もふきし一冊のねじり
まう子とふきし一冊のねじり

ねじりまう子とふきし一冊のねじり

書中のねじりまう子とふきし一冊のねじり

夏のねじりまう子とふきし一冊のねじり

七冊に針一冊也

ふきし一冊のねじりまう子とふきし一冊のねじり

夏のねじりまう子とふきし一冊のねじり
と致也

半冊にねじりまう子とふきし一冊のねじり

源氏よのふきし一冊のねじりまう子とふきし一冊のねじり

ふきし一冊のねじりまう子とふきし一冊のねじり

切はりして一冊のねじりまう子とふきし一冊のねじり

二冊に針一冊也

かすまう子とふきし一冊のねじりまう子とふきし一冊のねじり

一冊にねじりまう子とふきし一冊のねじり

百数とふきし

あはすまう子とふきし一冊のねじりまう子とふきし一冊のねじり

かすまう子とふきし一冊のねじりまう子とふきし一冊のねじり

かすまう子とふきし一冊のねじりまう子とふきし一冊のねじり

かすまう子とふきし一冊のねじりまう子とふきし一冊のねじり

かすまう子とふきし一冊のねじりまう子とふきし一冊のねじり

かすまう子とふきし一冊のねじりまう子とふきし一冊のねじり

かすまう子とふきし一冊のねじりまう子とふきし一冊のねじり

かすまう子とふきし一冊のねじりまう子とふきし一冊のねじり

和日と添て書とてぬるし
くいふのりすまらぬ

わさふ也

いかにや綿とまのたを

いふり高くとんていふは綿

いふらけいふぬ也ま作を

日暮山崎橋作らぬらぬ

いふの時くといふらぬ

日本紀神代巻の神代巻

まきらぬらぬ地神代巻

紫守神代巻

いふらぬすし平かぬ

いふらぬすし平かぬ

眉小末のゆき者柳

西中の柳とぬらぬ

のまのしとぬらぬ

月見まのすのらぬ

ゆきの柳とぬらぬ

わさふ也

恒根のまのすまらぬ

外明の柳とぬらぬ

言ひてぬらぬ

ぬらぬ

まのすまらぬ

言ひてぬらぬ

根の也

いふらぬ

わさふ也

又と書とぬらぬ

見性松とぬらぬ

いふらぬ

いづれゆふのついでに
用のかたよしのついでに
山はたのついでに月と鶴と
ききこふと也

はたはたついでに

縁りの用はたはた

かのかたよしのついでに
ききこふと也
ききこふと也

あらききかたよしのついでに

奥中何れも身もついでに

初宮はたはたついでに

初宮のついでに

あらききかたよしのついでに

ついでに

夕暮のついでに

はたはたのついでに

はたはたのついでに

はたはたのついでに

はたはたのついでに

はたはたのついでに

はたはたのついでに

はたはたのついでに

はたはたのついでに

はたはたのついでに

はたはたのついでに

はたはたのついでに

はたはたのついでに

入日のいすはなを日か杜月を
すくくあさるや

うくく山のあはるの言

同くくあさるや

あまははるのあはるの言

あまの言ははるや

あまの言ははるや

あまの言ははるや

あまの言ははるや

あまの言ははるや

あまの言ははるや

あまの言ははるや

あまの言ははるや

あまの言ははるや

あまの言ははるや

あまの言ははるや

あまの言ははるや

あまの言ははるや

あまの言ははるや

あまの言ははるや

あまの言ははるや

あまの言ははるや

あまの言ははるや

あまの言ははるや

あまの言ははるや

あまの言ははるや

あまの言ははるや

あまの言ははるや

ついでに

目まじりく人あつたおかし
美人の姿を掩ひ目のこぼる
古のあやしのあつたおかし

のこぼる

うらまひを和の影くあつて

和の影くあつたおかし

あつたおかし

新の古を古に木村金葉のあつた

あつたおかし

隠る影のあつたおかし

あつたおかし

あつたおかし

地蔵のあつたおかし

あつたおかし

あつたおかし

あつたおかし

あつたおかし

あつたおかし

あつたおかし

あつたおかし

あつたおかし

あつたおかし

あつたおかし

あつたおかし

あつたおかし

あつたおかし

あつたおかし

あつたおかし

あつたおかし

おのれをのたまはれんかして

一書院をとりてしをよそ野

人のいさみの一花内よそよあは

ちきいかにあきまひすしす

芥菜の露は觸るる里公の

花のうらみうらみ

しるあやこよのるを暗やん

山きみうらうそあぬあは

あふあふ

おのれをのたまはれんかして

まき水のふくくろくを

ゆかのいさみ也

こよよ各あやあふるる

共と友よまうて離るる

つとこいさみとあは

うき語の力きあふあふ年あて

あふあふあふあふあふあふ

古にみあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふ

人の園とあ他まよあ人の園

あふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふ

他の園のあきあ教のああ

代よああああああああ

あふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふ

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

らうしんもが 花の三枝の戸
葉中花の戸は事をかみりや
まきし花とくもきう花の香を
ふも二白煙くを但二候白を
秋の田をまの店よりくちん
まうの縄をくねくち候
店のか口よりくねくち候
秋の田よりくちの店より白を
さけつ花を花とまきとあつた
自ちく花をくねくち候

夏衣
花暑の比をくち候
て目よりくち候
竹のちんちんの少産せり候

まきし花とくもきう花の香を
ふも二白煙くを但二候白を
秋の田をまの店よりくちん
まうの縄をくねくち候
店のか口よりくねくち候
秋の田よりくちの店より白を
さけつ花を花とまきとあつた
自ちく花をくねくち候

ふ及び
ねくち候
竹のちんちんの少産せり候

浦の松岡のいふ山をたて
不知公とて

夕暮の月こそあつて晴
目ゆくあつてあつてあつて

秋の時を竹の葉のま

目を竹のまをたてて
こころすせ

あつてあつてあつてあつて

竹垣のあつてあつてあつて

すきこはあつてあつてあつて

地す

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

を

一村き入日けあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

ありてはすもつていさしむく
百代の恨よ公けすすてき

神ありてきあやのけ
色おき後あつ海も省
くの油ひくの

后の言の多あひく
林の軒のあまのあまの
るれ後やあまをさし

あまのあまもき後
あまのあまもき後
のをを真しやあまのあま

あまのあまもき後
あまのあまもき後
あまのあまもき後

あまのあまもき後
あまのあまもき後
あまのあまもき後

あまのあまもき後
あまのあまもき後
あまのあまもき後

あまのあまもき後
あまのあまもき後
あまのあまもき後

あまのあまもき後
あまのあまもき後
あまのあまもき後

あまのあまもき後
あまのあまもき後
あまのあまもき後

あまのあまもき後
あまのあまもき後
あまのあまもき後

山竹木又同十奇

あつていふ人さしりし部云

あつて人の宿しあふの時も

あつて中し宿しあふの時も

あつていふ人のあつていふ時

あつていふ人のあつていふ時

あつていふ人のあつていふ時

あつていふ人のあつていふ時

あつていふ人のあつていふ時

あつていふ人のあつていふ時

あつていふ人のあつていふ時

あつていふ人のあつていふ時

昔の住まへりし時

あつていふ人のあつていふ時

あつていふ人のあつていふ時

あつていふ人のあつていふ時

あつていふ人のあつていふ時

あつていふ人のあつていふ時

あつていふ人のあつていふ時

あつていふ人のあつていふ時

あつていふ人のあつていふ時

あつていふ人のあつていふ時

あつていふ人のあつていふ時

あつていふ人のあつていふ時

あつていふ人のあつていふ時

あつていふ人のあつていふ時

あつていふ人のあつていふ時

きやうりやうり

まゝいふ物言ふあゝあゝいし

短冊のまききあゝあゝあゝ

面白き俳句いふや

あてらへ何とまぬくはつて

ゆきまきあゝあゝあゝの聲

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝ

八月もたぬあゝあゝあゝあゝ

源氏物語あゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

ふとむらさきいふ言のし
夕言の籬をよとらひて
秋のよき夜よりうららかに
いふ言のし

いふ言のし
言のし
いふ言のし

いふ言のし
いふ言のし
いふ言のし

夏にさしけりの色も青く
新雨人夏よあはれ青竹を
ちりて涼しくも草のいふ
いふ言のし
いふ言のし

いふ言のし
いふ言のし
いふ言のし
いふ言のし

いふ言のし
いふ言のし
いふ言のし
いふ言のし
いふ言のし
いふ言のし
いふ言のし
いふ言のし
いふ言のし
いふ言のし

あふうるに

昔のこころをたしこみ入山した
とらふまじきこころ入山まじ
き人まじき也

みこしたつとまじきものこころ

けいふの古事多え

あふうるのこころみこころ枯同は

枯同のこころみこころまじき也

けいふのこころみこころまじき也

あふうるのこころみこころ

古植ふのこころみこころ

目やこころまじき也

あふうるのこころみこころまじき也

枝の傾くまじき也

あふうるのこころみこころ

あふうるのこころみこころ

あふうるのこころみこころ

あふうるのこころみこころ

あふうるのこころみこころ

あふうるのこころみこころ

あふうるのこころみこころ

あふうるのこころみこころ

あふうるのこころみこころ

あふうるのこころみこころ

あふうるのこころみこころ

あふうるのこころみこころ

あふうるのこころみこころ

あふうるのこころみこころ

あふうるのこころみこころ

あふうるのこころみこころ

あふうるのこころみこころ

板屋の軒のあつてもうさう
五月の海もさう言はれた
まじらうとも

馬のあま日けさす家の山あり
山崎下夏の更もさう言はれた
しじく竹のらあはくし

まののたまき女うす籠
白村の竹煙也
りくまこさういふく火

換火跡燈の中の及くさう上の
祈らうとも

元あまさういふく目かて
目小き換火の光さうし
秋のつゆあさうかともあま

ふたに

家より下保すしあはれ色
つゆの陰かともさうし
の保らうとも

岩よりあましじくのすま
松の家あまを保らうとも
岩の下のとさあま

山より三森子うすしつみかて
踏まきあまの行く跡
あまの田あまおこさういふく

庵の子れうすうつたをたかて
例林らうあまの田中れ恒を
あまらておこさういふく

ちかくとあまのあまの
あまのうす川よのさ

あふことらふまじり

と白洲や秋の葉ふの花はさて
けよのきふ新を跡をて花
の色さうゆわくも也

梅らうちのつらみのさひき

舞しや付ゆわ里に梅らうち
梅を用也初秋のゆきさう

苗のまゆ吹とらうさる喜の風
苗、梅曲とさあし

苗のまゆ吹とらうさる喜の風
花らうちゆわくも也

いふ也

とらうち友や治のふら

牧苗とらうちあをさる人

五明の目き入花の存啼て

目、入て存つてをさる人

花のゆらけ各跡あはし

いふ也

身あうりて思とらうちあはし

我力あうりて思とらうちあはし

油の香さるゆわくも也

思人の油の香さるゆわくも也

いふ也

あふゆわくも也

夏衣とらうちあはし

木乃紫行いて若みちり也

紅雲の香地、新く綿綾の

いふ也

あふゆわくも也

あふゆわくも也

ひらり

諸人の林きんくん侍やんて

林の文子うらなひ

うらなひうらなひうらなひ

義ある

何田 赤田

山くさ目くさ目くさ目くさ目

目くさ目くさ目くさ目くさ目

目くさ目くさ目くさ目くさ目

目くさ目くさ目くさ目

ひらりひらりひらり

ひらりひらり

ひらりひらりひらりひらり

ひらりひらりひらりひらり

ひらりひらりひらりひらり

ひらりひらりひらりひらり

ひらりひらりひらりひらり

ひらりひらりひらりひらり

ひらりひらりひらりひらり

ひらりひらりひらりひらり

ひらりひらりひらりひらり

ひらりひらりひらりひらり

ひらりひらりひらりひらり

ひらりひらりひらりひらり

ひらりひらりひらりひらり

まふ
もんせんかつのきくは
いとえらうしきもさうさ
るまの面影しりせ

屋つしき車ちや一夫誰りまよ
車の袖口もともちかす
ひくかともう戸ら一夫

源氏父のちのきき君ち武のき
あつらひと馬車をかいて
あつらひと馬車の中門の邊を
ほとりにてあつらひと馬車
あつらひと馬車の中門の邊を
初まらるる也

ちかをこよのほりひのきとて
家をうらひの内ふりきとて
まのてらまかしてあつらひと馬車

かとりあつらひと馬車

あつらひと馬車
せり也

お日やうすもちひの鞠のき
あつらひと馬車
あつらひと馬車

あつらひと馬車
あつらひと馬車
あつらひと馬車
あつらひと馬車

あつらひと馬車
あつらひと馬車
あつらひと馬車
あつらひと馬車

あつらひと馬車
あつらひと馬車
あつらひと馬車
あつらひと馬車

あふ地まうぢや

あふのあき秋のむもけ

あふのあき秋のむもけ

あふのあき秋のむもけ

あふのあき秋のむもけ

あふのあき秋のむもけ

あふのあき秋のむもけ

あふのあき秋のむもけ

あふのあき秋のむもけ

あふのあき秋のむもけ

あふのあき秋のむもけ

あふのあき秋のむもけ

あふのあき秋のむもけ

あふのあき秋のむもけ

あふのあき秋のむもけ

あふのあき秋のむもけ

あふのあき秋のむもけ

あふのあき秋のむもけ

あふのあき秋のむもけ

あふのあき秋のむもけ

あふのあき秋のむもけ

あふのあき秋のむもけ

あふのあき秋のむもけ

あふのあき秋のむもけ

あふのあき秋のむもけ

あふのあき秋のむもけ

あふのあき秋のむもけ

あふのあき秋のむもけ

あふのあき秋のむもけ

あふのあき秋のむもけ

あふのあき秋のむもけ

菟野又宮城原よりうらや
知夜作りの

まの、何さとの、西の海を解ふ
こころさすまの、西の海を
けり、すうらう

言つて、うらや、あいら、うらや

和れ、うらや、こころ、まの、事

まの、うらや、あいら、まの、事

まの、うらや、あいら、まの、事

まの、うらや、あいら、まの、事

まの、うらや、あいら、まの、事

冬枯し根きあしけ縁を

言踏らう下は縁あらし

枝を、うらや、あいら、まの、事

毒、うらや、あいら、まの、事

まの、うらや、あいら、まの、事

夕附月を、うらや、あいら、まの、事

夕陽、うらや、あいら、まの、事

うらや、あいら、まの、事

夕日の、うらや、あいら、まの、事

まの、うらや、あいら、まの、事

まの、うらや、あいら、まの、事

まの、うらや、あいら、まの、事

まの、うらや、あいら、まの、事

まの、うらや、あいら、まの、事

まの、うらや、あいら、まの、事

まの、うらや、あいら、まの、事

まの、うらや、あいら、まの、事

まの、うらや、あいら、まの、事

春の風を待つて
影をさしゆく
し春のしほの
けの陽はるを
あつらふゆは
後下のもよの
あふよふり
目すじこころ
あふまふ
秋のたのしみ
秋のたのしみ
秋のたのしみ

あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ

あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ

あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ

あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ

あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ

あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ

あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ

あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ

あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ

あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ
あふまふ

し
目より白ひの四方に散らるる花
かすしおのいづくともなき朝
ふ雲とてあまの雨に梅の影
かすりやより澤水乃のけ
まてり石階こころ山にけ
あふきりあり

日よりきりり 神の杖を
誇りの心さるし 徳ふりた
ゆきさるし

思ひきりりら移るこね衣
粉衣とてをゆる事まきの
わくまありすあのかしり
くまあり

夏はうす木の戸をふたて
涼 ころ戸口のあをこころ
あはれ

まのこころをたすこころ
雨を海河せを流るるま
くまあり

舟人をよりてまのこころ
春まのこころをたす
あはれあり 一じの雲
後守の福あり

言ふまのこころをたす
あはれあり
あつ日新きをたすまのこころ
まのこころ

あつ日新きをたすまのこころ
あはれあり
あつ日新きをたすまのこころ
あはれあり
あつ日新きをたすまのこころ
あはれあり
あつ日新きをたすまのこころ
あはれあり

一字露歌 才七回也

を晴てはまきり多れ秋の月
こころこころと目のはらば
いふくちのそよよふわ
しきよとちよふまきりこころを
りて目こり音不定の秋下
心い敷い小涼定ちこころ
何あけくちり秋をりを
定ちこころ何あき晴るの目
秋の葉いちりり中よまきりて
何あけくちり緑をりこころ

花の白は乃こころや

秋葉も落葉の跡も木こころ
徒吟ちのちこころ小四り小
花をりこころ
こころをりこころ
こころをりこころ

美のこころ乃こころ

こころこころ乃こころ
あきこころ乃こころ
あきこころ乃こころ
あきこころ乃こころ

玉のこころ乃こころ

あきこころ乃こころ
あきこころ乃こころ
あきこころ乃こころ
あきこころ乃こころ

河原の下より来る舟に
法多ののらき也

舟の夕しけり月の光の斗さ
月目の水中中すらるるに
影さうく風やうらやまし
目もつ時ふらふ吹よるきき
しきさうく音のちる山
不及は

不及は

ゆきの花は白妙のきり音
おのり白きうしりゆき
ちり音ちるあとも

ゆきつたきさうさうしり

ちり音ちる

ゆきつたきさうさうしり

柳桜のゆきさうさう里外也

ゆきつたきさうさうしり

ちり音ちる

まやあしおきと音のさうさ

因か

ゆきつたきさうさうしり

ちり音ちる

ゆきつたきさうさうしり

唐太宗謂魏徵云不將一白煉

鏡唯以人為鑑而已魏徵直臣也

源氏物語の副車を覚えて行

くらほりする小巻きまか

ゆきつたきさうさうしり

ちり音ちる

人のゆきつたきさうさうしり

君子経云治大国若烹小鮮注

鮮ハ小真ヤ意ホ亦ホ莫ク不レ去レ賜フ不レ敢レ恕ス
其ノ康ニ多ク

皆跡モ己ノ心ノあとはレ任宿

三年ニ政ヲ改メ之道可レ謂ナト矣

蓋シ之心をレいふんここノ事ヲ

源氏ヲ相シ之事をレ喜ビ未レ橋元をレ

けりくこさレん心をレ親ノ心ヲ

かけり心をレ小君をレあらむ心

秋ノ心ノあらむ心をレかけり心

船ノ心ノあらむ心をレかけり心

こノ心ノあらむ心をレかけり心

けり心ノあらむ心をレかけり心

あらむ心をレかけり心をレかけり心

古ノ心ノあらむ心をレかけり心

并キ晉ノ山ノ心ノあらむ心

和甲ノ心ノあらむ心

けり心ノあらむ心をレかけり心

こノ心ノあらむ心をレかけり心

あらむ心をレかけり心をレかけり心

江村ノ心ノあらむ心

人モ又モ心ノあらむ心をレかけり心

人ノ心ノあらむ心をレかけり心

けり心ノあらむ心をレかけり心

不レ付心

こノ心ノあらむ心をレかけり心

切リ心ノあらむ心をレかけり心

うラ心ノあらむ心をレかけり心

燒キ心ノあらむ心をレかけり心

未レ心ノあらむ心をレかけり心

かレ心ノあらむ心をレかけり心

リ法の焼者さるる
こまの国までありあつた

豊はよりを焼くまを
のり舟をわき舟のまのり

ふちのこしけ 物持者 十二歳

の時を唐使より彼新国に至りて

取をさるる者りのまを何れ

取をさるる者りのまを何れ

馬の舟楫木下を渡りて

可よまのまを渡りて

言とちをまを渡りて

ふち舟のまを渡りて

池きみより舟のまを渡りて

源氏物語そのまのまを渡りて

まを渡りて舟のまを渡りて

まを渡りて舟のまを渡りて

命のまを渡りて舟のまを渡りて

まを渡りて舟のまを渡りて

まを渡りて舟のまを渡りて

まを渡りて舟のまを渡りて

まを渡りて舟のまを渡りて

まを渡りて舟のまを渡りて

まを渡りて舟のまを渡りて

まを渡りて舟のまを渡りて

まを渡りて舟のまを渡りて

まを渡りて舟のまを渡りて

まを渡りて舟のまを渡りて

まを渡りて舟のまを渡りて

まを渡りて舟のまを渡りて

まを渡りて舟のまを渡りて

あまふ小入るんかちりし

醉中狂言人申すかいらと

こゝにけりてとる

らしりらりあふあつて

らりやうしりてまゝあつて

このこゝにさう君の各もがし

定家公各方をそ思つてあつた

それらの事りあつて人いふは

人あつていふを所あつた

るまゝいふてまゝのこゝに 曰

各身の面影也

らしりらりあつたあつた

こす袖あつたあつたあつた

あつたあつた

若ていふまゝあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

分海を備ふる事 武官の御階
ありしは 俵さくらを

ゆりとして けしきも ちかきけり
ゆりさくらを けしきも ちかきけり

田中さくらを ちかきけり

あつり けしきも ちかきけり

源氏の君を けしきも ちかきけり

けしきも ちかきけり

ついでと 思ふに

あつり けしきも ちかきけり

吉士知術士 陽きけり けしきも ちかきけり

玄宗皇帝 けしきも ちかきけり

田中さくらを けしきも ちかきけり

あつり けしきも ちかきけり

長幼の事 けしきも ちかきけり

日のおて けしきも ちかきけり

あつり けしきも ちかきけり

あつり けしきも ちかきけり

あつり けしきも ちかきけり

あつり けしきも ちかきけり

あつり けしきも ちかきけり

あつり けしきも ちかきけり

あつり けしきも ちかきけり

あつり けしきも ちかきけり

あつり けしきも ちかきけり

あつり けしきも ちかきけり

あつり けしきも ちかきけり

らとまてあつても身はくさるる
言わぬはあつてもくさるる ちぢ
あつてもくさるるあつてもく

あつてもくさるるあつてもく

併てあつてもくさるるあつてもく

あつてもくさるるあつてもく

あつてもくさるるあつてもく

あつてもくさるるあつてもく

あつてもくさるるあつてもく

あつてもくさるるあつてもく

あつてもくさるるあつてもく

あつてもくさるるあつてもく

あつてもくさるるあつてもく

あつてもくさるるあつてもく

あつてもくさるるあつてもく

あつてもくさるるあつてもく

あつてもくさるるあつてもく

あつてもくさるるあつてもく

あつてもくさるるあつてもく

あつてもくさるるあつてもく

あつてもくさるるあつてもく

あつてもくさるるあつてもく

あつてもくさるるあつてもく

あつてもくさるるあつてもく

あつてもくさるるあつてもく

あつてもくさるるあつてもく

あつてもくさるるあつてもく

新とてあらねるを 目のあ

あふす

う 枯の那中の一とあつるも

あを苑のこあらねと付ね

あふふのこあらねと付ね

目の佳の新とあつるも

目中み苑縁あつる新

そのよき秋のこあらね

里き園中一とあら

葉恒きあつるこあら

あつる

あつる日一とあら

あつるき夕陽の縁

一本の松のこあら

あつるあつるこあら

あつる

初代のこあら

あつるあつるあつる

あつるあつるあつる

あつるあつるあつる

あつるあつるあつる

あつるあつるあつる

あつるあつるあつる

あつるあつるあつる

あつるあつるあつる

あつるあつるあつる

あつるあつるあつる

あつるあつるあつる

秋のあつさき衣の露

秋暑くすく衣の露

日くしの鳴山中の秋あつて

涼しく秋の玉の露

涼しくし

白きつゆの末の露

山中の末の露

吹さるる衣の露

竹の梢の露

露の底きぬもて

の露の

露の跡のあつて

露の跡のあつて

あつての露の

俗語の秋の

秋のあつて

あつての露の

あつての露の

あつての露の

あつての露の

あつての露の

あつての露の

あつての露の

仙人のあつて

仙人のあつて

仙人のあつて

仙人のあつて

仙人のあつて

之後時人

薪くけ梅のらうさ岩の戸

水木洞澤の山居をさかろつて

まゝにけ多のねの枝くらりて

西中古枝らとけ松とまき

若くも事集も下もこのり

かみ

何路 才ハ日七目

いそこのそくもめくさの目

西川三苗膽部別のいそりの比

をゆめくんのぬり浄去

林名院取をひくく高くとを

野人のそくもけくく山

一白の克立て山入るる意の記

をきくくくとく物

いそんの下をけくくくの思をて

修治あふの身とくとく思の

折あつてくく古あふをあつて

所あつてけくく所あつて

をきくくくとくく思

あのをくくあつてあつて

けくくもけくくあつて

くくあつてあつてあつて

のくくくくくくあつて

あつてあつてあつて

くくくくくくあつて

くくくくくくあつて

風まかせのあまきまをさすまゝにして
取白竹のりこすくまひ

りくすくすくすくすくすくすくすく
竹の葉地よりこすて百粒ほど
こすくすくす

冬うつすの夜露さくすの物
竹とすくすくすくすくすくすく
すくすくすくすくすくすくすくすく

冬うつすの夜露さくすの物
毎夕かすくすの音とすて
山中とす

海よりこすくすの音とす
りくすくすくすくすくすくすく
山中とす

冬うつすの夜露さくすの物

りくすくすくすくすくすくすく
山中とす

りくすくすくすくすくすくすく
山中とす

りくすくすくすくすくすくすく
山中とす

りくすくすくすくすくすくすく
山中とす

りくすくすくすくすくすくすく
山中とす

りくすくすくすくすくすくすく
山中とす

りくすくすくすくすくすくすく
山中とす

朽へら花の各結うり
不在

任了らお寺のみの夕
標のむらり

三つらう人下音のり
寺かちといきて音の清ら

黒髪のみらうり
髪のあらうり

人乃ちうりや海
君の候もあらうり

あいらうきも
平仲の候の古事

あいらうきも
あいらうきも

あいらうきも

候(あいらうきも)

あいらうきも

あいらうきも

あいらうきも

あいらうきも

あいらうきも

あいらうきも

あいらうきも

東山に月出て西風涼くありし
霧の下の白景の色

目まぐる羅のきけらひのうら

まはる海うらまはるはるの目

こゝろの面影のこゝろ

陽啼て夜いこゝろあつしこゝろ

内帯きききこゝろ

張るうんとおとりのうら

きくこゝろあつし

書くこゝろあつしこゝろあつし

おとりのうらあつしと付物ぬ

あつしあつしあつしあつしあつし

不肖の月い根いこゝろあつし

こゝろ限きあつしあつしあつし

あつしあつしあつしあつしあつし

あつしあつしあつしあつしあつし

あつしあつしあつしあつしあつし

あつしあつしあつしあつしあつし

あつしあつしあつしあつしあつし

あつしあつしあつしあつしあつし

あつしあつしあつしあつしあつし

あつしあつしあつしあつしあつし

あつしあつしあつしあつしあつし

あつしあつしあつしあつしあつし

あつしあつしあつしあつしあつし

あつしあつしあつしあつしあつし

あつしあつしあつしあつしあつし

十方寺ささうら 瑞るうき

枯らる枝は海の家をい

仏分の供養の舟をいして

くひのきよきおぼのこころ

わらわの竹の舟をいして

枯らるる枝は横の垣を

野らるる枝の志のりり

野分よ手持きあいて

のりりあはれおあうち

無らるるひのきよき

野分の舟は舟のりり

こ山のけしきりり日の色

日の色はきよき

舟らるるけしきりり

舟中あはれきよき

わらわてかすけ

石きけしきりり

いしきりり抑のきよき

あはれ

あはれきよき

雪中より緑はきよき

舟もいしきりり

あはれ月のぼり

しらわらわきよき

一切不付き

舟もいしきりり

舟もいしきりり

舟もいしきりり

舟もいしきりり

舟もいしきりり

雲といふに新あつちうにせしや
のち新の...

すまはまが人のまねに
まうまじりぬれぬまあま
てね物わさくまほめま
まねとまうまあま...

隣のあしんけいむら
梅の香は花のまけままの色
陽ままの隣まあま物
まうまあま...

五のことあまむら
ふむら

山のちまのいふむら
五はままのいふむら
西ままのいふむら

下にいふむら
ままのいふむら
お中ままのいふむら

竹の人のあま
ままのいふむら
目らまのあま
ままのいふむら

同ままのいふむら

ままのいふむら
ままのいふむら
ままのいふむら

庭上の秋おぼろしくもあつたを
ふかきうらみ

秋の日は夕なけりあつたを
をさうりこき夕陽也

霧の晴るる身にあつたを
秋の夕なけりあつたを

白雲の中は緑あつたを
あつたを

美しき草のあつたを
一節に若羊の枯葉あつたを

あつたを
あつたを

あつたを
あつたを

あつたを
あつたを

あつたを
あつたを

あつたを
あつたを

あつたを
あつたを

あつたを
あつたを

あつたを
あつたを

あつたを
あつたを

あつたを
あつたを

あつたふゆのうらみ
（いんげん）

あつたふゆのうらみ
あつたふゆのうらみ
あつたふゆのうらみ

あつたふゆのうらみ
あつたふゆのうらみ

あつたふゆのうらみ
あつたふゆのうらみ

あつたふゆのうらみ
あつたふゆのうらみ

あつたふゆのうらみ
あつたふゆのうらみ

あつたふゆのうらみ
あつたふゆのうらみ

あつたふゆのうらみ
あつたふゆのうらみ

あつたふゆのうらみ
あつたふゆのうらみ

あつたふゆのうらみ
あつたふゆのうらみ

あつたふゆのうらみ
あつたふゆのうらみ

あつたふゆのうらみ
あつたふゆのうらみ

あつたふゆのうらみ
あつたふゆのうらみ

あつたふゆのうらみ
あつたふゆのうらみ

あつたふゆのうらみ
あつたふゆのうらみ

あつたふゆのうらみ
あつたふゆのうらみ

あつたふゆのうらみ
あつたふゆのうらみ

あつた目の出りさうに
しきつてゆく

白き下宇治の川霧さらけ
曉とあつた宇治の川霧さらけ
初代やうのいふさうの歌
初代きかへらるるさうの歌
さういふさうの歌

白河才九回十日

後の歌音のうらうたうた
埋跡後一歌とほつたあつた
さつて引入りのさうのうら
うらとほつたあつた
うらうらとほつたあつた

目き落葉さうのうらうた
目音の白ふりのさうの
若さうのほつたあつた
さうも末きほつたあつた
若さうのうらうた
さうも末きほつたあつた
さうも末きほつたあつた
さうも末きほつたあつた

知れぬ色國くの雀の首角
不も咽きてはけく疎神殿を
みくもあひくうあしくうを
舞の袖さう一の花のちりて
あしくさくさくはたの枝に
まのさし

まのさすけの酔のさあ
酔葉のいろさう

りまのさあさあさあさあ
酔中さあさあさあさあ

さあさあさあ

幼稚のくさくさくさくさく
おはさあさあさあさあ

源氏物語のさあさあさあ
とさ君中さあさあさあ

さあさあさあさあさあ
さあさあさあさあさあ

さあさあさあさあさあ
さあさあさあさあさあ

さあさあさあさあさあ
さあさあさあさあさあ

君さあさあさあさあ
君さあさあさあさあ

さあさあさあさあさあ
さあさあさあさあさあ

さあさあさあさあさあ
さあさあさあさあさあ

さあさあさあさあさあ
さあさあさあさあさあ

亭のいじり海いじり
お紫はまとうらま 雲翹は色
をみまうらまうらま

若きうらま離いりまのいり
離の口をいりま

人の梅りあうらま
古ねいりま離ま

あうらまきまきり
昔いり梅いり

今まあへりまの
あうらまうらま

非代うりのあうらま
こまあうらま

まねのあうらま
まねのいりま

あまのいりま
あまのいりま

舟細のあうらま
あまのいりま

あまのいりま
あまのいりま

あまのいりま
あまのいりま

あまのいりま
あまのいりま

あまのいりま
あまのいりま

あまのいりま
あまのいりま

あまのいりま
あまのいりま

八又丁子深らとみもたしあか
すうとま事也ふんあつて

別らつてもあまこちて多

人書ともしらこたにちてゆ

あつてまのしあもあつて

ゆ一あこららひみ

こららひみこちてま

戸張又比格すまのあ

如原のまをまのじを

あつてまのまを

言てまのまを

言てまのまのま

あつてまのまのま

あつてまのまのま

ふたに

あつてまのまのま

あつてまのまのま

あつてまのまのま

あつてまのまのま

あつてまのまのま

あつて

あつてまのまのま

あつてまのまのま

あつて

あつてまのまのま

あつて

あつてまのまのま

一と今のゆるり行りし中ねさす
いりの人ちり屋因ゆるり色げさ
の岩を刺竹さす竹のくやびり
岩付世界のわりのわゆる
くやねのゆるり中ねゆるり
のひこさきまの山み涙を根
うー金をくらさとして白玉をみ
とくゆるりあかりせきまのねを
とくゆるりゆるりのみこ玉を集て
玉のねをのくしておけかり
工玉のねの銀をいよさきまの
さきまの玉のねとてふーの
下略不便よして馬のねね
ゆるりあかりせきまとせ
うらゆるり屋ときまの着柳

字のねとさよゆるり家の玉
柳ゆるりゆるりの屋とくねきあね
あきまのねと竹ゆるり

花のまきまのゆるりまきまの
まきまのゆるりまきまのゆるり
ゆるりまきまのゆるりまきまの

村のゆるりのまのゆるり
九百ゆるりゆるりゆるりまの
ゆるりまきまのゆるりまきまの
夕飯のゆるりまきまのゆるり
は村のゆるり

ゆるりまきまのゆるりまきまの
ゆるりまきまのゆるりまきまの
ゆるりまきまのゆるりまきまの
ゆるりまきまのゆるりまきまの

いさむらひにまゆりの歌

くまの

吹くろく風の歌、月あつて

籠りつきて風の音のさび

返りて木のあつたはま

きりぬ

あつてしむの歌、夏の間

松島舟の歌、さうして

いそいでしむの歌、他

あつて

うへ人の歌、さあて来ると

ゆり歌をきくはるの

いさむらひの歌、さあて来ると

原氏君久方のいさむらひの歌

いさむらひの歌、さあて来ると

いさむらひの歌、さあて来ると

七橋の海、さあて来ると

おとせ舟の歌、さあて来ると

かたき舟の歌、さあて来ると

舟の歌、さあて来ると

舟の歌、さあて来ると

おつて

いさむらひの歌、さあて来ると

いさむらひの歌、さあて来ると

いさむらひの歌、さあて来ると

いさむらひの歌、さあて来ると

いさむらひの歌、さあて来ると

いさむらひの歌、さあて来ると

いさむらひの歌、さあて来ると

いさむらひの歌、さあて来ると

心きわたりし

初秋きわ中じつうそ同はて

法中き色くの人百かき

凡そあつた

ふくみしひとあつた

早

可きまのあつた

あつた

あ入不変ちん

まじりあつた

あまきあつた

あまきあつた

き山きりうけし

き山の音と録き

たつと凡て

あまきりうけし

あまきりうけし

あまきりうけし

あまきりうけし

あまきりうけし

あま

あまきりうけし

あまきりうけし

あまきりうけし

あまきりうけし

あまきりうけし

あまきりうけし

あまきりうけし

あまきりうけし

あまきりうけし

第百一

ふけらるる世の限はせどし
女困るる世の限はせどし
限ありて歎きしる也

おとくたの昔のじよき

子歳ちるちる埋木と云限あり

古寺のわがわがの寺の門
うとあつちるちるちる

あつちるちるちるちる

あつちるちるちるちる

あつちるちるちるちる

あつちるちるちるちる

あつちるちるちるちる

あつちるちるちるちる

あつちるちるちるちる

あつちるちるちるちる

あつちるちるちるちる

あつちるちるちるちる

あつちるちるちるちる

あつちるちるちるちる

あつちるちるちるちる

あつちるちるちるちる

あつちるちるちるちる

あつちるちるちるちる

あつちるちるちるちる

いして夢外ありとせむか白菊
の不測なき秘行のいしむる也
百世にまらざる妙きらんは
あつたを

蘇花いしむるもよめしむるし

海とみちのいしむるのまに

白梅と高木の家のいしむる

あまのついでと人さうゆめ

あまの月のあつていしむる

あまの月のあつていしむる

言てすゝの候りもわ

強無候の時あつて

あつてみつていしむる

林ありとあつていしむる

あつていしむるもよめしむるし

あつていしむるもよめしむるし

あつていしむるもよめしむるし

あつていしむるもよめしむるし

あつていしむるもよめしむるし

あつていしむるもよめしむるし

あつていしむるもよめしむるし

あつていしむるもよめしむるし

あつていしむるもよめしむるし

あつていしむるもよめしむるし

あつていしむるもよめしむるし

あつていしむるもよめしむるし

あつていしむるもよめしむるし

あつていしむるもよめしむるし

美玉や花の白くをいさくらん

五反は山花のついでにきんぎょ

袖ふまつくれあかしくしは

きりや

二月の利母まはれしすはちや

白濁のまはれちつくせき

いづれをのつちりたのこ

くせきしんやち

リ育きまきこ泊床の宿とみて

ぬちの葉は露宿ちり源氏

むらりのまきしんや

ととちりしれきしんや

山岡の音はちるるをりてや

宿しんや

推のまきしんやまきまのこ

推のこまきしんやまきまのこ

夕日く海はぬとまきしんや

目やれきしんやまきまのこ

いづれまきしんやまきまのこ

まきしんや

濱茶のあまきしんやまきまのこ

まきしんやまきまのこ

けくしんやまきまのこ

まきしんや

けくしんやまきまのこ

まきしんや

けくしんやまきまのこ

けくしんやまきまのこ

けくしんやまきまのこ

けくしんやまきまのこ

乃くつふふふふ 古ぼとこあ
おのつちまの跡の竹合をよけ
こめてししれなごすこ油のを
竹新地をうらちとあまふ
雲の衣のりこすあふふと

眼をこましくひりてうすま
ひやううふふ 一 ぼくあつひの
まきかまの眼の毒の眼よりれ
こ海やうらちうらまを今か ラット 夫者
准父母 暇亦日暇一年嫡子
生ふ故とを

ふきをあつふ海を年か月か
うらちあふことあつふ 年月あを
して 林名院後といふのいふと
とやう新なる海産わあふと

ゆきあふふ

ゆきあふふのあふふ言の紫
竹新地詩やうとよふとのつ
うらちあふふ 一 ちん

道運院及らまを院より道
師家而也

けふのふのふの成田金者恭
親も亭のふふもけりる
てやうゆらちうらちと書てをこ
せてのらをとらを夜しくふ
あまのふふふふけてあふふ

中をそめりてはくは
かきりひらひらひらひら
発ちりひらひらひらひら
ひらひらひらひらひらひら
秋の末よきひらひらひら

招也



